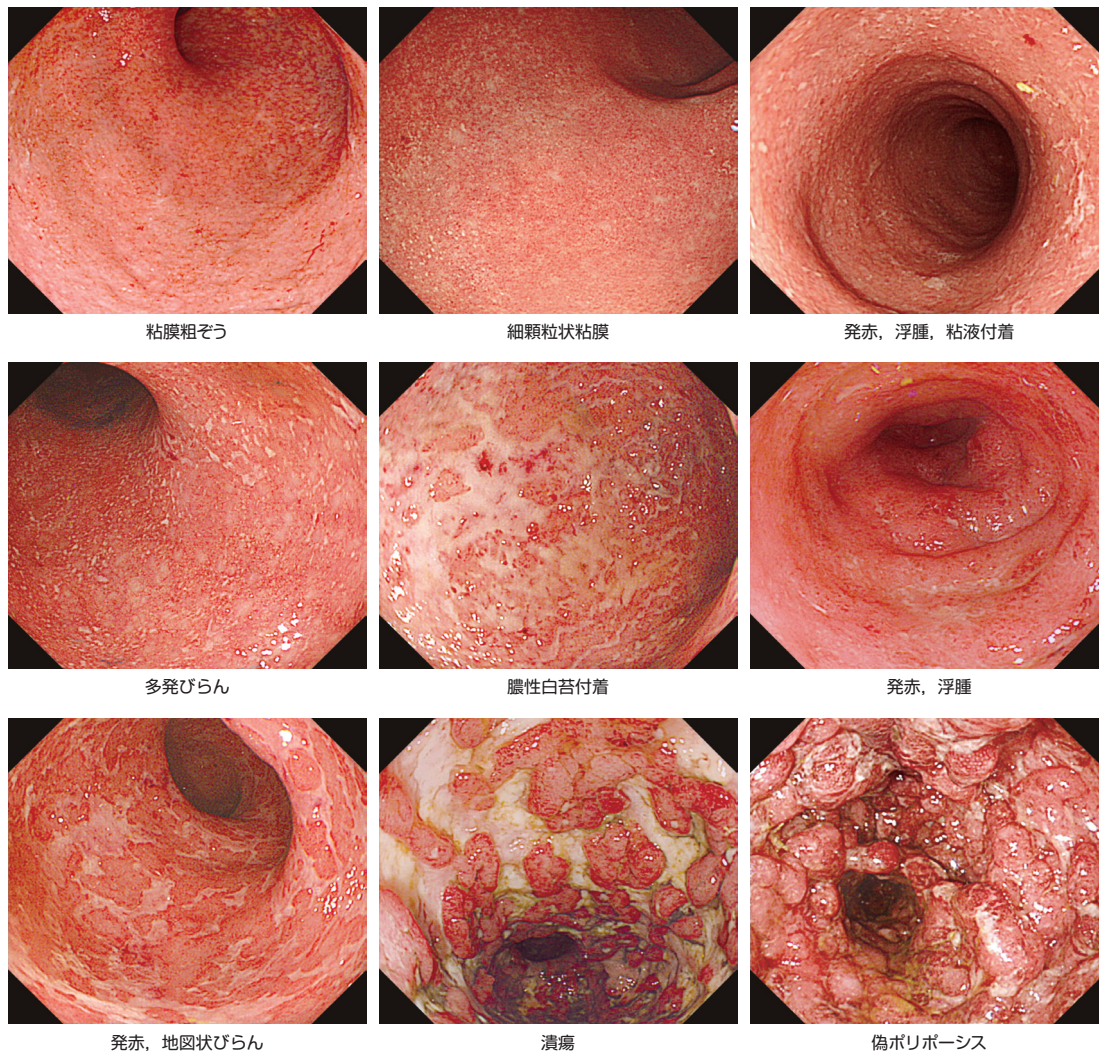


# 01 潰瘍性大腸炎 (UC)

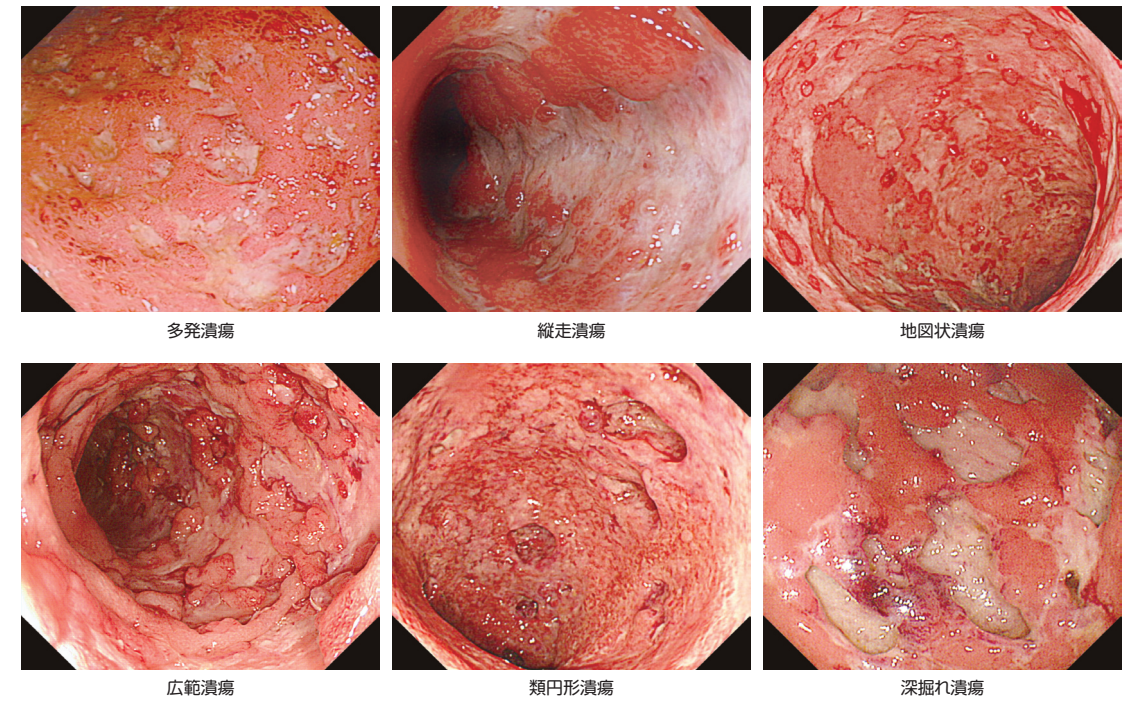
## 疾患の定義・特徴

- 大腸粘膜にびらんや潰瘍を形成する原因不明のびまん性非特異的炎症である。
- 主たる臨床症状は「持続性または反復性の血便もしくは粘血便」である。
- 発病率に性差はなく、若年発症が多いが、50歳以上の高齢発症も少なくない。
- 薬物療法は、主として重症度と罹病範囲、また年齢に応じて選択される。
- 全大腸炎型では罹病年数の増加とともに大腸癌の発症リスクが上昇する。

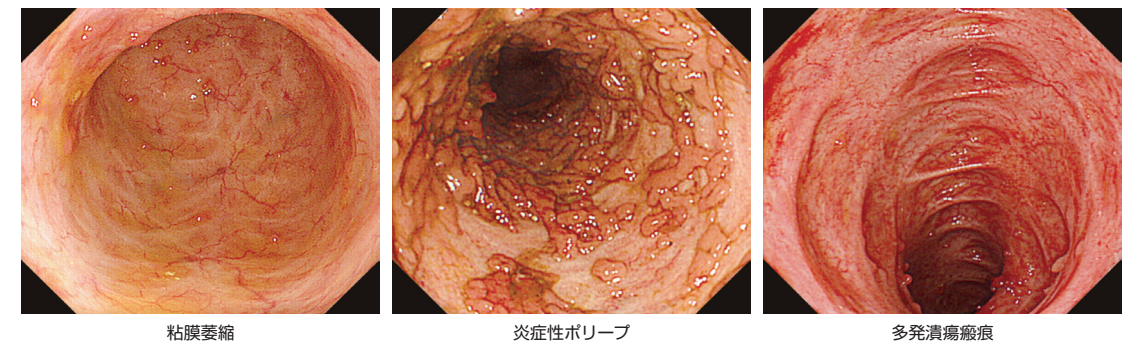
潰瘍性大腸炎の内視鏡像の特徴：粘膜びまん、血管透見像消失



## 種々の潰瘍



## 寛解期の内視鏡所見



## 診断のポイント

- 全周性で直腸から口側へ連続性に広がる発赤、びらん、潰瘍を特徴とする。
- 内視鏡像や病理所見に疾患特異性はなく、感染症の除外が必要である。
- 連続性の有無、潰瘍形態や配列、周囲粘膜の炎症の程度から総合的に診断する。
- 本疾患に特異的な病理組織所見はなく、病理組織所見は参考所見としての価値はあるが、診断のgold standardとはならない。
- 初回の内視鏡検査で診断が確定できず、経時的な経過観察が必要な場合もある。
- まれに患者が血便に気づいていない場合や、血便に気づいてすぐ来院する（病悩期間が短い）場合もあるので注意を要する。

(上野義隆, 田中信治)